

平成 24 年 10 月 17 日

浅野史郎さんのご講義を拝聴して

森山 花鈴
Karin MORIYAMA

18 歳の頃、大学に入った私は、入学式の時にたまたま隣に並んでいた友達に誘われ、何気なくボランティアサークルに入った。サークルに入ったのは、ただなんとなく、サークルの先輩たちが「楽しそうだった」から。

でも実は、そのボランティアサークルは結構本格的で、ろう学校訪問（手話）、知的障害者施設訪問、高齢者施設訪問、重度心身障害児（者）施設訪問、独居の高齢者宅訪問、学内献血のお手伝いを行うサークルだった。

浅野さんが重度心身障害児施設を訪問された時のお話を伺って、サークルに入ってしばらくして、私が初めて重度心身障害児（者）施設を訪問することになった時のことを思い出した。浮かんだのは、本当に同じ疑問だったからだ。

施設に入って私が目の当りにしたのは、床に転がっている方たち、寝たきりの方たち、水頭症の方たち…、当時 18 歳の私には、それはとても衝撃だった。

最初は、先輩に連れられるままで、自分がそこに行く意味も、正直わからなかった。けれど、夏には施設の一室を借りてお化け屋敷を作り利用されている方の喜ぶ姿を見たり、毎月伺うたびに食事介助（当時は出来た）をしていく中で少しだけ変わる表情を見たり、訪問にいらっしゃるお母さんの顔を見て、少しだけ自分の中の何かが変わっていった気がした。

それから私は、大学の近くで小児脳性麻痺を抱えながら自立生活を試みている方の食事介助を、ボランティアで手伝うようになった。そこで私は、「障害者」というくくりで判断していた自分自身を恥じるようになった。

その方は、今でも私の大切な知人のひとり。くだらない話も一緒にすれば、たまにちょっとハメを外すから私が怒ったりもする。でも、一步外に出れば、大きな車いすは注目を集め、周りの人からは少なからず変な目で見られてしまう。私は、その周りの目に、違和感を感じるようになった。

そんな生活を過ごしていく中、私は大学の授業で、一本の映像を見る。NHK クローズアップ現代「お父さん死なないで—～親の自殺 遺された子供たち～」

という番組だ。この番組をきっかけに、私は、大学3年生から、病気や災害、自殺などで親を失った子どもたち、親が障害を持って働けない状況にある子どもたちを支援する、あしなが学生募金に関わるようになった。活動を通して、子どもに重度障害があったことで思い悩み、自殺してしまった母親を持つ友達とも出会った。お父さん自身が重度障害を抱える家庭の友達にも出会った。

いろいろなものを見ていく中で、現場を見てしか感じられないものが、たくさんあった。浅野さんのいう「情報のシャワーを浴びる」というのは、まさしくそういうことなのだと思う。そんな中で、私は「自殺対策」に携わりたいと思うようになる。それは、社会のひずみというか、いろんな問題が解決されずに、最悪な結果として表れてしまうのが「自殺」だと、私は思ったからだ。

そこから、私は、大学院で修士号を取得した後、現場を知りたいと、何のツテも無かった自殺対策のNPO法人自殺対策支援センターライフリンクに飛び込んで、働かせてもらえることになった。代表の清水康之さんは、あのクローズアップ現代の映像をNHK時代にディレクターとして作成した方だ。

そして、そのNPO勤務時代に、私は、ゆきさんに出会い、さらにその後、内閣府で働くことになって村木厚子さんの下で働くようになり、そして、本当にたまたま—ゆきさんからの誤送信メールで—、この講座のことを知り、浅野史郎さんともお会いすることが出来た。不思議なご縁で、すべてが何かでつながっていて、「運命」では、と私は勝手に解釈している。

今は、内閣府を3月で辞め、大学院の博士後期課程に在籍しながら、非常勤の研究員として研究所で働いているが、そこでは知的障害研究にも携わっている。これまであまり知らなかった発達障害のことも携わるようになり、別の分野に接したことで、新しい気づきも多く、浅野さんのおっしゃる「足下に泉あり」というのは、まさしくその通りなのだと思う。また、大学の非常勤講師を始めたばかりの私には、浅野さんの講義スタイル自体がとても参考になった。いきなり真似は出来ないけれど、少しでも追いつきたい。

浅野さんのおっしゃる「運命」という言葉は、本当に心に響いた。自分はまだ、この後の運命がどうなるかわからない。でも、運命に寄り添い、生きていき、そして、浅野さんのような「伝える力」のある人になりたいと思った。

いつか、一聴講生としてではなく、浅野史郎さんにまたお会いできたらと思う。その日まで、“運良く”ゲットすることができた御著書『運命を生きる』を大切に、「運命」に感謝しながら、日々の努力を怠らないようにしていきたい。